

「国宝 平等院鳳凰堂内 西面扉絵 日想観」の 学術的復元模写制作について(2)¹

Research on Academic and Scientific Restoration of “National Treasure.
Nissou-Kan, the Wooden Doors Painting (west side) of Byodo-in Hoo-do” (2)

荒木 恵 信
ARAKI Keishin

はじめに

本研究の研究対象である「国宝 平等院鳳凰堂内 西面扉絵 日想観」(以下、研究対象作品と記す)は、平等院鳳凰堂創建当初1053年の制作である。一方、筆者が先行研究で研究対象とした「国宝 平等院鳳凰堂内 北面側壁 中品中生図」(以下、中品中生図と記す)は、鎌倉時代の制作と考えられている。どちらも堂内を荘厳する壁扉画であり、基底材に檜を用い、漆による加工が施されている。しかし、その加工方法は両者で全く異なる。中品中生図の場合、檜材と檜材との接合箇所を覆うため細長く布着せを施した後、画面全面に黒色の漆下地を形成する。そしてこの表面に絵具による下地層をさらに形成して来迎図を描く²。かたや研究対象作品には、後述する加工の他には布着せも漆下地も施されていない。この差異の要因としては、制作年代の違いがまず挙げられるが、この他に堂内の環境に関わる重要な意味があるのだと推測されるものの、これには更なる考察が必要である。

本稿では前回の報告³に続けて、研究対象作品の学術復元模写制作における漆の加工方法を報告する⁴。

加工の準備

研究対象作品に施されている漆の加工は、檜材と檜材との継目に彫り込まれたV字の溝を、繊維くず

や木粉を混ぜ込んだと考えられる漆(以下、木屎漆と記す)で埋めるものである。学術的復元模写の基底材にも研究対象作品と同様の溝をつけ、粉碎した麻の綿と木粉とを混ぜた木屎漆でこの溝を埋めることとした。

最初に基底材の表面に余分な漆が付着しないよう、V字の溝の周囲をマスキングテープで養生する(図1、2参照)。V字の溝は基底材側面まで彫り込まれているので、ここにも養生をする。研究対象作品の制作時にはこの様な養生はされなかったとも考えられるが、本研究では画面への影響を考慮して行った。

次に、漆に混ぜる麻の綿を準備する(図4参照)。麻布を粉碎する際には、長い繊維が混入すると仕上がりが不均一になり表面に影響を及ぼすため、繊維の長さが0.1cm以下になるようにする。

この麻の綿を漆に混ぜて木屎漆を作る(図5参照)。漆は日本産生漆を使用する。まず、米糊にこれと同量になるまで日本産生漆を徐々に加えながらなじむまで混ぜ合わせる。これに、先に作った麻の綿をだまが出来ない様に少しずつ加えてさらに練り混ぜる。混ざりきった所で、木粉を加えて細い溝を埋めるのに適した粘度に調整する。

木屎漆による加工

木屎漆をV字の溝に埋める(図6、7参照)。竹べら(図3参照)を使用し、檜材と木屎漆との間に空気の層ができない様に少しずつ丁寧に施す(図8参

照)。木屎漆の内部までしっかりと乾燥させるため、一度に埋める厚さは約0.05cmである(図9参照)。V字の溝の深さは0.3cmであるため6回にわけて実施した(図10~17参照)。徐々に厚みを増してゆく木屎漆によってV字の溝は埋められ、画面の高さとおおよそ同じになる。V字の溝からはみ出している箇所があればこれを削り落とし、画面全体に凹凸がない均一な状態にする(図18、19参照)。その際、画面に傷をつけないよう注意をする。欠損箇所があれば、改めて木屎漆で補う。

その後、養生のマスキングテープを剥がし、基底材に余分な漆がついている場合はぬぐい去り、完成とする(図21参照)。

結びとして

研究対象作品には、多くの人々が共有できる芸術的・学術的・歴史的などの文化価値がある。これらの価値を物質的に形成しているのは様々な材料であり、これを生かす技術である。材料や技術をより深く理解する試みは、文化財の保存に繋がることはもとより、次世代の新たな文化財を生み出す糧となると確信する。

註

- 1 本研究は平成17年度科学研究費補助金基盤研究(C)(17500693)及び、金沢美術工芸大学教員奨励研究(平成17~20年度)の研究助成を受けた成果の一部である。
- 2 荒木恵信:「国宝 平等院鳳凰堂内板壁絵(北面側壁)中品中生図(部分)」における絵具の経年変化および想定復元に関する研究、『鳳翔学叢』創刊号、pp.71-147、(2004.03)参照
- 3 荒木恵信:「国宝 平等院鳳凰堂内 西面扉絵 日想観」の学術的復元模写制作について、『金沢美術工芸大学紀要』第60号、pp.2-8、(2016.03)参照
- 4 本稿の執筆にあたり、研究協力者が本研究で作成した工程表と撮影した画像を使用している。

謝辞

本研究にあたりまして多大なご協力とご指導を賜りました宗教法人平等院、独立行政法人国立文化財

機構東京文化財研究所、研究協力者の竹村祥子氏、中村有希氏、長屋桃子氏、その他関係者の方々に深く感謝申し上げます。

(あらかき・けいしん 日本画専攻/文化財保存学)
(2016年10月31日 受理)



図1 左扉用基底材の養生



図2 右扉用基底材の養生



図3 材料と道具

左上から灯油、篩、日本産生漆、米糊用白米、麻の綿、木粉、ティシュペーパー、ナイロン製ラップ、竹べら、プラスチック製漆べら、木製漆べら、小刀、漆台

図4 麻の綿の作成



図4-1 糊をひいた麻布を筒状に丸める



図4-2 糊が乾いたら細かく裁断する



図4-3 裁断した麻布に水を加えて粉碎機にかける



図4-4 粉碎機にかけた状態①



図4-5 粉碎機にかけた状態②



図4-6 粉碎機にかけた麻布を天日干しする



図4-7 天日干しで水分が全て蒸発した後、再度粉碎機にかける



図4-8 麻の綿の完成

図5 木屎漆の作成



図5-1 米糊をつくる

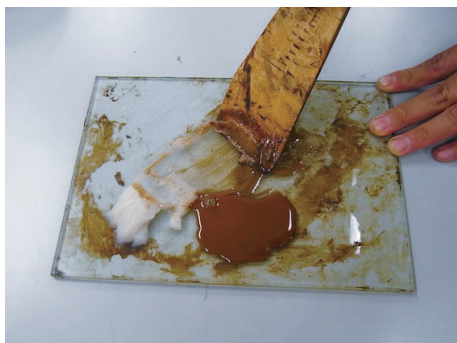


図5-2 米糊に日本産生漆を加える

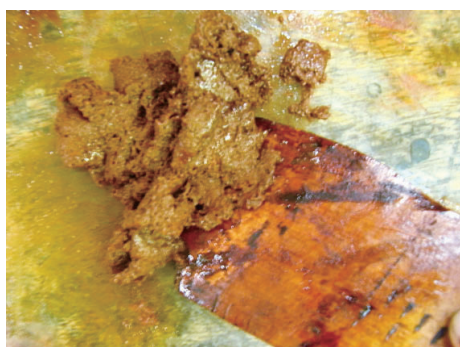


図5-3 米糊と日本産生漆をよく練り混ぜる



図5-4 麻の綿を加える



図5-5 糊漆と麻の綿をよく練り混ぜる①



図5-6 糊漆と麻の綿をよく練り混ぜる②

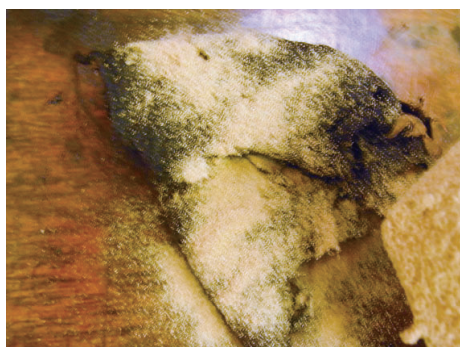


図5-7 木粉を加えてよく練り混ぜる



図5-8 木屎漆の完成



図6 右扉用基底材 木屎漆による加工の途中の状態①



図7 左扉用基底材 木屎漆による加工の途中の状態



図8 木屎漆による加工の作業風景



図9 加工の初期段階

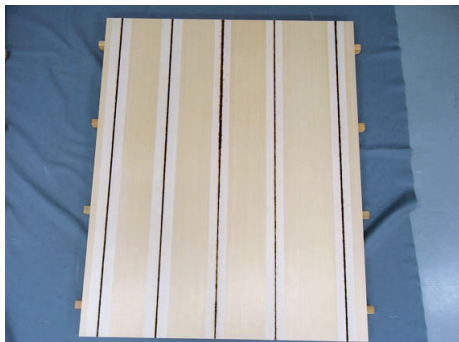


図10 右扉用基底材 木屎漆による加工の途中の状態②



図11 加工の中期段階①



図12 加工の中期段階②



図13 加工の中期段階③



図14 加工の後期段階①



図15 加工の後期段階②



図16 加工の後期段階③



図17 加工の後期段階④



図18 埋め込みが終了した直後



図19 マスキングテープを剥がして完成



図20 マスキングテープを剥がしている



図21 完成